

身体^{ファントム}の幻影と道具の生成

—メルロ＝ポンティの幻影肢論の射程—

廣瀬浩司

はじめに

「ボディ・イメージ」ないしは「身体図式 (Körperschema)」の概念を展開し、それをフロイトのリビドー概念と結びつけて豊かな問題を提起したことで知られる生理学者 P・シルダーのある患者は、自分のからだの写真が撮られ、はるか遠くの街の調査者の手元にあると訴えた。調査者がそれを見るたびに、その知覚が患者に感じられ、患者の思考もその写真に飛ぶ。こうして患者が倒錯者かどうか審査されているというのだ。シルダーによればこの症例は、自己の写真や鏡像と自己自身のあいだの深い連関を示しているという。

この連関を証明するためにシルダーは簡単な実験をおこなう。鏡の前に座り、パイプか鉛筆を強く握る。そのとき圧迫感や手触りは自分の手の指だけでなく、鏡の像の知覚されるまさにその場所^{プロジェクション}において感じられる。シルダーによれば、これはたんなる自己の感覚の投影ではない。鏡の中の感覚は直接的でオリジナルである¹。身体的感覚は、まさに「そこ」、つまり鏡の中で直接に感覚されている。したがって他者に見られているという感覚が、遠く離れた自己の写真において直接感じられたとしてもけっして不思議ではない。

この実験を援用しながら晩年のメルロ＝ポンティは次のように述べる。「鏡の幻影が私の肉体 (chair) を外部に引き出す。それと同時に、私の身体 (corps) のうちで見えないもの全体が、私が見る別の身体を備給 (investir) することができる。以後、私の身体は他の身体から採取した断片^{セグメント}を身につけることができるようになる」²。このようにして鏡は、見えるものと見るものの回路において「生じ (surgir)」、それを無限に二重化する。メルロ＝ポンティによれば、こうした身体の再帰性 (réflexibilité) があるから、その受動と能動のあいだに

¹ Paul Schilder, *The Image and Appearance of the Human Body : Studies in the Constructive Energies of the Psyche*, New York, Science Editions, 1950, pp. 223-224.

² Maurice Merleau-Ponty, *L'Œil et l'esprit*, Paris, Gallimard, 1964, p. 33.

鏡という「技術」が生じるのであって、逆ではない。この鏡像＝機械モデル³をもとに、メルロ＝ポンティが身体の「根源的なナルシズム」を語り、能動と受動の「可逆性 (réversibilité)」を究極の真理としたことはよく知られている⁴。

こうしたメルロ＝ポンティの一見思弁的な論述については、その自己閉鎖性を指摘する方向の批判は少なくない。それに対置されるのはサルトルの「他者のまなざし」論であったり、ラカンの「他者 (Autre)」であったり、レヴィナスの超越的な「顔」としての他人であったりする。自己イメージの二重化や可逆性などという考え方は、他者の超越性、他者性、非対称性の否定であり、自己の身体は他者によって対象化されたり、疎外されたり、分断されたり、人質のごとく包囲されたりしているはずだというわけである。また身体についても、それは自己の身体である以前に、まず社会的に規定された「権力」(フーコー)や「ハビトゥス」(ブルデュー)の担い手であるとされる。こうした論者たちにとっては、たとえば自己の身体をみずから感じるという経験は二次的なものである⁵。

ここでひとつひとつ反論することはできないが、こうした批判がメルロ＝ポンティ哲学にたいする理解の狭さを示していることは指摘しておかなければならない。彼らはメルロ＝ポンティを心理学的に解釈しすぎているのである。ただしそれは、メルロ＝ポンティ自身が『知覚の現象学』で「心理学から始める」という方法を取ったことにも起因する⁶。自己の身体や知覚世界の現象学的記述がこの書のもっとも豊かな成果であることはまちがいがなく、今日の認知心理

³ シルダーはヴィクトール・タウスクを援用しながら、「機械は身体を象徴し、患者の写真はそのような機械である。それは鏡像、外部における自己自身の一部だ」と述べている。op. cit., p. 223.

⁴ Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964, pp. 183, 204.

⁵ サルトルのまなざし論とラカンの鏡像論への反批判としては、拙論「ヘテロトピアのまなざしと制度の身体」筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』1997年、pp. 127-140を参照。また Mikkel Borch-Jacobsen は「ラカンの自我は自らを理論的に観相している (se théoriser) かぎりの自己であって、自らを感じたり、自らを感得 (s'éprouver) するような自己ではけっしてない」ことを明快に論証している (*Lacan le maître absolu*, Paris, Flammarion, 1990, pp. 72-77)。ただしラカンの流れを汲む精神分析 (たとえば F. Dolto) は、「身体図式 (神経生理学的で種に固有な図式)」と「ボディ・イメージ (言語的で主体の特異性に関係)」を厳密に区別しているが、本稿ではこの問題には立ち入らない。Cf. Gérard Guillerault, *Les deux corps du moi* (schéma corporel et image du corps en psychanalyse), Paris, Gallimard, 1996.

⁶ Cf. Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 77. (以下 PP と略し、頁数を記す。)

学者の一部がメルロ＝ポンティを読み直しているのもこの豊かさのゆえなのだが⁷、まさにそれゆえにメルロ＝ポンティは「生きられた身体」「生きられた世界」の哲学の代表者であり、彼の思想において言語や社会制度、さらには科学的客観性などは周辺に押しやられているという印象が生じてしまったのであろう。

しかし『知覚の現象学』にかんしてすらこうした理解はあまりにも狭隘である。知覚世界の現象学的記述、彼の言葉で言えば「現象野」の記述はあくまで必要かつ暫定的な出発点であり、この書の最終的な目的は「現象野」が「超越論的領野」へとおのずから変容する過程を追跡することにある（PP, 77）。そこで問題になるのは、「合理性の第一次的な設立」ないしは「存在の根拠」としての世界と主体の関係の解明であり、科学的認識主観をモデルとする「無関心な傍観者」がこの世界にどのようにして「身を落ち着けるか（s'établir）」ということである（PP, XV, XVI）。

言い換えるならば、理性や客観性の発生論的分析が目指されていたわけであり、「生きられた世界」を科学に対立させることが目的ではない。彼の課題は、科学や客観的世界を含んだ経験全体を暴き出し、そのうえでそれらが経験にどのように到来するのかを解明することにあつた。

そこで本稿では、『知覚の現象学』の現象学的な記述の出発点となる幻影肢の分析を取り上げ、それがたんに実存主義的な「生きられた身体」の記述にとどまらず、超越的対象の「意味」の自己発生の問題を提起していることを示す。さらに、同書の習慣論をこうした意味発生の積極的側面として取り上げ、それが身体と「道具」の関係、さらには身体と文化的世界一般の關係の解明に役立つことを示唆することにする。

1. 幻影肢論の系譜

いわゆる「身体図式」の存在ないしは障害を示すものとして、「ファントム現象」あるいは「幻影肢」（phantom limb, membre fantôme）と呼ばれる現象があることはよく知られている。それは、事故などのあとで急に切断された身体の部分が、切断後もまだ存在していると知覚される現象のことである。

⁷ たとえばフランシスコ・ヴァレラは「とりわけメルロ＝ポンティの業績によって最初に方向付けられたことは、現代の認知科学において、意識に代表される問題にとって決定的な重要性を持っている」と断言している。Francisco Varela, 《Préface à l'édition française》, in F. Varela, E. Thompson, E. Rosch, *L'inscription corporelle de l'esprit*, trad. V. Havelange, Paris, Seuil, 1993, p. 10.

この現象は古くから知られており、すでにデカルトによって分析されているが、組織的に研究されるようになったのは第二次大戦による多くの戦傷者の観察の増加によるのだという⁸。幻影肢は、たんに知覚されるだけでなく、膨張収縮し、他の手足とともに動き、ときには激しく痛んだり、痒くなったりする。

この印象的な現象にかんしては『知覚の現象学』が書かれた 20 世紀半ばまでに、さまざまな説が出されていた。

第一に末梢説である。それは、切断された部分の感覚が末梢神経から中枢に伝えられ、すでにない足の感覚を繰り返し呼び起こしているというものである。しかしこの説は早くから排除された。というのも、たとえば末梢の感覚つまり切断部分の感覚をコカインで麻痺させたとしても、かならずしも幻影肢はなくなるしないし、逆に大脳の損傷が幻影肢と似た現象を引き起こすこともあるからである。また、幻影肢は負傷して切断されたさいに実際の腕が占めていた、まさにその場所に現れる傾向がある⁹。たとえば戦争で腕を失った人が、幻影としての腕のなかに砲弾の破片を感覚し続けるという例もあるという (PP, 90)。こうした現象の出現を、残された末梢の感覚によってのみ説明することは到底できない。

そこで幻影肢の原因を、脳の中枢に残された痕跡として説明しようとする中枢説が生まれる。手足のかつての感覚が脳内に痕跡として残されているという考え方である。たとえばデカルトはこの視点から「手の痛みは、手にあるものとして精神によって感じられるのではなく、脳内にあるものとして感じられる」¹⁰と述べている。

だがこの中枢説を採用したとしても、脳内痕跡の総体がどのように行動や意識を構成するのかという問題が生じる。そこで今度は心理的ないしは情動的な要因が持ち出されてくる。切断の原因となった事故が思い出されたり、ショックが戻ってきたりしたときに、切断という事実を認めたくないという心理的な要因がはたらき、幻影肢が出現するというわけである。この立場によれば、幻影肢はひとつの記憶、意志、信憑である (PP, 91)。子供より大人に現れやす

⁸ 幻影肢および身体図式概念にかんする学説史としては北條敬「シルダーと身体図式論について」、P. シルダー『身体図式——自己身体意識の学説への寄与』所収、金剛出版、1983年、p. 125以下を参照。そのメルロ＝ポンティとの関係については河野哲也『メルロ＝ポンティの意味論』創文社、2000年、とりわけ第四章を参照。

⁹ Paul Schilder, *op. cit.*, p. 64.

¹⁰ Descartes, *Les Principes de la philosophie*, 4^e Partie, n° 196, AT, IX, II, p. 25; Alquié tome III, p. 511.

いという事実もこの説を補強するものだろう¹¹。だが、メルロ＝ポンティがレルミット(J. Lhermitte)を援用しながら述べているように「いかなる心理学的な説明といえども、脳に通じる感受的な伝導路を遮断すれば、幻影肢が消滅するという事実」(PP, 91)を無視することはできない。幻影肢の現象は、たしかに身体的・物理的な次元のみでは説明できないが、身体的・物理的な次元と無縁なものではなく、それどころかそれを土台としてのみ現れるものなのである。

この三説を検討したうえでメルロ＝ポンティは、生理学(末梢説と中枢説)と心理学をともに基礎づけてくれるような立場を模索する。つまり生理学だけ、心理学だけでは説明できず、また両者をたんに混ぜ合わせるだけでも理解できないような「中間項」を見いだし、両者の「出会い」(PP, 92)を準備すること、それが彼がまず提起する問題なのである¹²。

2. 幻影肢の実存主義的解釈

そこでメルロ＝ポンティは『行動の構造』ですでに論じていた例を参照しながら、幻影肢の現象を動物の「代償行為(suppléance)」になぞらえることから始め、それを「世界内存在(être-au-monde)」に固有な現象として説明しようとする。

たとえば脚を不意に切断された動物は、残された他の脚を使って正常に歩いたり泳ぎ続けたりしようとし、それにともなって新たな歩行や遊泳の新たなスタイルを確立する。この「適応」の過程は、機械的な「本能」によって説明されるものではない。たんに人間にひとつの脚を掴まれたとしても、いたずらにもがくばかりで適応行動は発動しない。脚を切断された動物は反射的に行動しているのではなく、「正常」に動きつつづけようという「課題」に応答しようとしているのだ¹³。しかし動物が、ある行動スタイルで、ある特定の場所へ移動しようという「目的」を明確にイメージ化し、表象しているとも考えられな

¹¹ Michel Bernard, *Le corps*, Paris, Seuil, 1995, p. 24.

¹² したがって諸科学が現象学的態度において「誤り」であるとみなされたとしても、それは「自然的誤謬」であり、科学を含む経験全体のなかで位置を持つ。こうした方法はとりわけ初期のメルロ＝ポンティに特有なものである。Cf. Maurice Merleau-Ponty, *La structure du comportement*, Paris, PUF, 1942, p. 236.

¹³ Cf. Maurice Merleau-Ponty, *Nature* (Notes, cours du Collège de France), établi et annoté par D. Ségald, Paris, Seuil, 1995. また拙稿『舟なき航跡としての生——メルロ＝ポンティにおける生命

い。そのような「課題」は、動物がおのれの「身体」と環境のあいだで試行錯誤的に練り上げていくものであり、それを意識的な目的と考えてしまうのは、外的な観察者による回顧的な再構成にすぎない。

したがって代償行為は、たんなる反射でも明確な目的の表象でもない第三の次元で展開する。それはいわば盲目的な目的論に従って行われるのである。メルロ＝ポンティはこの事態を実存主義的な用語に翻訳し、代償行為は「同一の世界に向けて存在し続けること（＝同一の世界内存在であり続けること）(continuer d'être au même monde)」によって動機づけられているという。動物もまた世界への開けをもっているのであって、この開けにおいて「動物は、みずからおのれの環境の諸規範を投企し、みずからおのれの生命にかかわる問題の終局点を定立する」(PP, 93)。動物はみずからの規範を設立し、みずからの目的を定立しながら、世界へと開かれているのである¹⁴。

しかしここでひとつの疑問が生じるであろう。有機体が一つの世界に向けて存在し続けることによって幻影肢の出現が動機づけられている、と言ったとしても、それは幻影肢の出現が不可能でないということの説明にはなっても、それがいかに可能になるのか、ということの説明にはならないのではないか。それは幻影肢が世界内存在に基礎づけられていることの証明にはなっても、手や足の特定の場所が今という時になぜ痛むのかということの説明にはならないのではないか。要するにメルロ＝ポンティは、生理学や心理学の前提する客観的な世界の上に、もうひとつの世界、有機体によって生きられた世界を重ねているだけなのではないか。

この疑問に答えるためには、みずから規範を設立する身体が、たんに自閉的なものではなく、超越的な対象に遭遇しうるものであることを示さなければならない。

3. 知覚対象の超越性と身体の本質的不均衡

そのためにメルロ＝ポンティは「反射」概念を検討し直す。「反射」の現象は、たんに刺激と反応の一対一の関係ではない。ある刺激が反応を引き起こす

科学』筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』第45号、1997年、p. 3以下をも参照。

¹⁴ この分析はメルロ＝ポンティの思想発展という視点から見ても興味深い。というのは、『行動の構造』において彼は、動物と人間のあいだに明確な線を引き、あたかも動物は「道具」の使用をしらず、世界にたいする「開け」も持たないかのような記述をしていたからだ (*La structure du comportement*, Paris, PUF, 1942, p. 180)。

ためには、要素的な諸刺激が相互に体制化され、「意味(sens)」を持った構造として、有機体によって受け取られなければならない。この場合「意味」とは、対象のもつ微妙なテクスチャー、表情、起伏の作り出すベクトル的な価値のことであって、いずれにせよ感性的な所与に根付いた、生まれつつある「ゲシュタルト」として現れる。他方、有機体のほうも、潜在的な運動によって刺激を「先取り」し、みずから刺激の構造を描き出しているものでなければ、刺激を刺激として受け取ることはできない。

たとえば地面の一定の起伏は、ある特定の歩き方を直接に要求し、そのようなものとして意味を持っている。身体はそうした「意味」を身体図式に体内化することによって、一定のリズムで歩き続ける。有機体の自己運動と刺激の構造の自己発生はたがいに基礎付け合っているのであり、そこには循環的な因果性が成立している (PP, 89)¹⁵。

この循環的な因果性の媒介によって、有機体と感覚対象は相互に絡み合う。身体図式の「ゲシュタルト」と呼ばれるものは、この絡み合いの場そのもののことであろう。このゲシュタルトの媒介によって、有機体はみずからの運動の実践的空間を繰り広げる。それと相関して、対象のほうも特定の「意味」を持ったものとして知覚され、運動を規制し返している¹⁶。

すぐに注意しておかなければならないが、この循環的な関係は、有機体と環境の直接的な融合関係ではない。有機体の反応は感覚的所与への直接的な反応

¹⁵ こうした相互的基礎付けのことをメルロ＝ポンティはフッサールの用語を使って、「内容と形式のあいだの Fundierung の関係」と形容している (PP, 147)。だがメルロ＝ポンティの最終的目的はこうした相互的基礎付けを両義性として記述するだけでなく、さらには「最初の設立ないしは土台 (le premier établissement ou la fondation)」（フッサールの Stiftung という語の仏訳）として残り続ける内容の「根源的偶然性」「自然の贈与」を解明することにあることは忘れてはならない。言い換えるならば、相互的基礎付けそのものに場を与えるような、絶対的な受動性が問題なのである。これが自然の概念についての一連の講義の課題である。

¹⁶ ヴァレラ、トンブソン、ロッシュらはメルロ＝ポンティのこの循環的因果性の分析に注目し、彼ら自身の enaction という概念を練り上げている。enaction 概念によって彼らは以下の二点を示そうとしているのだという。(1) 知覚とは知覚的にガイドされたアクション (perceptually guided action) であること (2) 認知的構造は回帰的な感覚運動的パタン (recurrent sensorimotor patterns) から生じ (emerge)、このパタンが「知覚的にガイドされたアクション」を可能にすること。F. Varela, E. Thompson, E. Rosch, *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*, London: MIT Press, 1991, pp. 172-174. またこうした認知論的転回が「超越論的領野」の再発見であり、さらにはその非主観化によってメルロ＝ポンティの晩年の思惟と重なり合っていく事情については、野家伸也「認知論的転回——認知科学における現象学的思惟」『思想』(岩波書店)、No. 916, 2000年10月、pp. 213-217を参照。

ではなく、状況の「意味」に対する反応であり、あくまで世界の包括的な「先取り」であるということ、このことは身体と環境とのあいだに微妙な「距離」をはさみこむことでもある。その事態をメルロ＝ポンティは「距離を持った(a distance)」先取りと表現する。たとえば要素的な感覚への純粋な「反射」にも、刺激と反応のあいだに距離が介在している。

じつのところ、反射そのものもけっして盲目的なプロセスであることはない。反射は状況の「意味」にみずからを適合させるのである（中略）。それは対象の点的な刺激を予期することなしに、対象の構造を距離を持って描き出す（dessiner à distance）のである（PP, 94）。

こうした「距離」の意味をさぐるため、簡単な例を挙げて私たちに展開し、メルロ＝ポンティのその後の思想展開を意識しながら、彼自身がかみならずしも明示的に語っていない帰結を引き出してみよう。

たとえば緩やかなリズムで舗装道路を歩いていた人が、道ばたの小石を履んでしまい、歩行のリズムを狂わされ、あやうく倒れそうになったとする。その人は生まれて初めて小石のある道を歩いたと仮定する。このとき身体は「反射的に」手をはげしく動かすことによってかろうじてバランスを保ち、緊張とともにその場に立ちつくし、やっと以前の歩行のリズムを取り戻すだろう。この一連の過程を司っているのが「身体図式」である。それは以下の三つの不可分な契機をはらんでいると思われる。

第一に、ここで働いている身体図式は、たんに身体の諸部分を統合するゲシュタルトであるばかりではなく、偶然の対象の現れにたいして開かれており、それによって「傷つけられうる（vulnérable）」（PP, 159）ものである。

第二に、こうして傷つけられた身体図式はみずから回復しようとする。程度によっては、以前の身体図式が通用しないこともあるだろう。そのとき身体は、現れた偶然的対象を要素として含んだ、新たなゲシュタルトを先取りしなければならない。

この第二の契機は、おおげさに言えば生命を賭けた飛躍であり、これがうまくいかなければ身体は倒れ、歩き続けるのをやめてしまうかもしれない。小石を踏んでしまった身体が歩き続けるためには、歩行の新たなゲシュタルトをいわば時間的に先取りし、偶然的な対象の現れを意味へと生成させなければならない。こうして小石だらけの道は、「歩き続けることができる道」という価値

を呈示する道になる。身体も、小石に遭遇しても転倒しないような歩行のスタイルを身につける。小石の現れという否定性が、新たな身体図式の中に組み込まれるのである。

第三に、この過程においては、知的な総合作用は介在しない。それは徹頭徹尾、身体と環境との感覚＝運動的な関係に密着している。したがって第一と第二の過程はゲシュタルトの自己変容の過程であり、身体図式はみずからの内に発生した傷を、みずから修復しなければならない。新たなゲシュタルトは、身体感覚を外から統合する原理として到来するのではなく、その諸要素の区切り直し（脱中心化と再中心化）によって到来する、と言ってもよい。

この区切り直しの過程において、偶然的な対象は意味へと生成する。この意味の生成も自発的である。というのは、それはおのれに意味を与えてくれるようなゲシュタルトをみずから作り出すような生成であり、自己の存在条件をみずから作り出さなければならないような、飛躍をはらんだ生成であるからだ。

これらのことを逆に考えてみるならば、問題は身体が徹頭徹尾おのれにしか関係せず、みずからの感覚と運動によってのみ変容しているにもかかわらず、超越的对象の偶然性を経験できるのはなぜなのか、そしてそれが超越的なものとして経験されるにもかかわらず、それを取り込んだ新たなシステムを再構築できるのはなぜなのか、これらのことを同時に説明することにあると言えよう。これは、はじめに提起した、身体のナルシズムとその開放性の関係の問題にほかならない。

身体がそのようなものであるためには、身体図式は本質的におのれにたいする差異をはらんでいる不安定なシステムとして考えられなければならない。身体図式が内的な差異をはらみうるような不安定なシステムであるからこそ、ひとは超越的な対象をそれとして経験することができるのであって、逆ではない。身体図式の不均衡が生じたときに、その内的な差異を通して、ある対象の現出がかいま見られる。その現出は本質的に偶然的であり、それまでの身体図式にとっては<知覚しえないもの>である。それはあるシステムの崩壊と別のシステムの到来を内的に連結させる媒介的な時空間においてしか現れないと言ってもよい¹⁷。だがこの差異は、あくまで感性的世界に根付いた内的差異、その脱中心化である。だからこそ身体図式は、知的な同一化を経由することなく、偶然的な対象の現れをみずから制禦し、超越的な対象の現れに開かれることがで

¹⁷ Cf. Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, p. 283.

き、均衡が回復したときにその「意味」を捉えることができるのだ。

こう考えるならば「身体図式」と呼ばれるものは、「図式」としてよりは、ある姿勢のシステムから別のシステムへの行為の「移行」として定義されるほうが有効であろう¹⁸。あるシステムから別のシステムへの移行、またはあるシステムとそれを統合する別のシステムとの移行の時空間において、身体図式は本来の媒介機能を発揮するからである。それは平常の姿勢を支える静態的な図式なのではなく、むしろ不均衡が生じたときにのみ顕在化し、そこに生じた新たな意味をそのつど沈殿させていくような潜在的な場なのである。

他方、それは外的な規制原理や秩序原理をもたないシステムであるから、再中心化や移行はかならずしも成功せず、媒介的な場においていわば足踏みし、差異を差異のままに露呈してしまうこともある。そのとき媒介的な契機(=「距離」)が露わになり、意味となりえない対象、知覚し得ない対象が現れてくる。それが幻影肢である。幻影肢は、環境の偶然性と有機体の統合を媒介する微妙な「距離」において出現する。身体がある内的な欠如を経験し、それをいまだ新たな図式に統合し得ないとき、その欠如を証言するように幻影肢が現れるのである。

身体と環境を結びつけながら区別する「距離」、それ自体は知覚し得ないが知覚を可能にする差異、これこそが新たな対象が意味として現出するための密かな根拠であると同時に、その失敗の根拠でもあるのだ。

このような潜在的なシステムとしての身体図式は、均衡と不均衡、秩序とカオス、規則と逸脱、形式と内容、形相と質料、同一性と差異といったもろもろの伝統的な対立では説明できないが、こうした対立の両項を含んだ二重の存在である。この二重の存在の哲学的な地位を確定すること、それこそがメルロ＝ポンティ哲学のもっとも重要な課題であると思われる。ここでは立ち入ることはできないが、この課題に本格的に取り組むことこそが、晩年の「存在論」導入のひとつの動機であるのかもしれない。それは新たなタイプの存在を主題化することを必要とするからである。

¹⁸ アフォーダンス理論の系統の心理学においても、「姿勢」は環境の情報の抽出のための「アクション」であり、身体の動きは「姿勢から姿勢への変化」と定義される(佐々木正人「姿勢が変わるとき」、佐伯・佐々木編『アクティブ・マインド』東京大学出版会、1999年、p. 96)。しかしアフォーダンス理論と異なり、メルロ＝ポンティは環境の「情報」を実在化することはなく、それが「差異」としてのみ現れることを強調する。アフォーダンス理論とメルロ＝ポンティの発生的現象学の関係については、長滝祥治『知覚と言葉——現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い』ナカニシヤ出版、1999年、第4章参照。

4. 習慣的身体と非人称性の到来

超越的な対象の現出は、身体図式に本質的に内在する「内的差異」として経験されるものであった。次になすべきことは、この対象の相関者たる身体が、どのような現出様式を持っているのかを検討し直すことである。

1) 幻影肢の準現前

メルロ＝ポンティによれば、古典的な生理学と心理学の誤りは、幻影肢を現前と不在のカテゴリーで説明しようとしたことにある。生理学によれば、幻影肢は内受容的な刺激の存続であり、身体的表象の一部分の「実際の現前 (présence effective)」として考えられている。しかし前節の分析は、こうした要素的な表象は身体的先取りを地平としてのみ現れることをあきらかにした。他方、古典的な心理学によれば、幻影肢とは一種の記憶、すなわち現在の知覚の否認にもとづく、かつての「実際の現前」の表象だということになる。

しかし欠損を拒否する患者は、手足の表象を端的に否認しているわけではなく、判断の次元では欠損を理解している。彼は腕の表象を「目の前にいないひとりの友人の存在を生き生きと感ずるように」(PP, 96) 非定立的に意識している、とメルロ＝ポンティは言う。

したがって、幻影肢の現出様式を、現前と不在の対立で説明することはできない。「腕の幻影肢は腕の表象ではなく、腕の両価的な (ambivalent) 現前」(PP,147)ないしは「準現前 (quasi-présent)」(PP,101)である。すなわち、現在の身体感覚のまわりに地平としてとどまっている、ある種の不在の現前なのである。

だから切断された腕や足は「いかなる過去のインデックスももたずに胸の上に顕在的に折り畳まれている (actuellement replié)」(PP, 101) ものとして知覚される。たとえばシルダーは、切断された指が折れ曲がり、はげしい痛みを感じる患者の例を挙げている。また幻影肢は実際の身体を貫通したりすることもあるという¹⁹。しかし幻影肢が顕在的な身体と同等なものとして現れるからといって、それは経験主義的な心理学が仮定する「イメージ」として意識の前で対象化されてもいない。それはあくまで砲弾によって切断された、まさにその手足なのであって、このようにつねに回帰しつづける不在として、それは「ファントム」なのである。幻影肢とは「過去になってしまうことを決めかねているかつての現在」(PP, 101) である、とメルロ＝ポンティは言う。

¹⁹ P. Schilder, *op. cit.*, p. 65.

ここでメルロ＝ポンティは、一見サルトル的な例や用語（不在の友人の現前、準現前）を使いながら、「即自的な身体」そのもの、その感覚そのもののなかに、不在や否定を、文字どおり「折り畳」もうとしていることは注目しておくなければならない²⁰。身体そのものが、想像的意識や「他者のまなざし」などの到来以前に、すでに二重の存在なのである。つまり身体の二重化は、本来的な身体の疎外や投射によるものではない。それははじめから二重化しており、いわば幻影肢は自己の「客観的」身体と同時に成立するのである。

身体図式とは、身体のおのれ自身へのこうした折れ重なるの場である。それが外にたいして折り広げられるとき、外的な対象が知覚される。反対に内側に折り畳まれるとき、身体のナルシシズムによって幻影肢が出現する。しかしこれらの運動はじつは同じ一つの身体図式の二つの極端な顕在化の様式であって、その意味で表裏一体なのである。この身体のそれ自身にたいする折れ重なり、それを次に検討することしよう。

2) 顕在的身体と習慣的身体

身体の自己二重化、この奇妙な事態を『知覚の現象学』のメルロ＝ポンティは、身体の二つの「層」を区別することで説明しようとする。それは「習慣的身体 (le corps habituel)」と「顕在的身体 (le corps actuel)」と呼ばれている。幻影肢の出現に関わっているのは「習慣的身体」である。習慣的身体とは何か。

たとえば手を失ったとき、私はもはや対象を「手で取り扱う (manier)」ことなどできはしないことは知っている。こう判断しているにもかかわらず、どうして対象は「手で取り扱うことのできるもの (maniable)」として今もなお知覚されるのだろうか。そのために対象は、私がいま「顕在的に」手で扱うものであるのではなく、「ひと (on) が手で取り扱うことができるもの」に変容していなければならない。それは「私にとって取り扱い可能なもの (maniable pour moi)」から「それ自体で取り扱い可能なもの (maniable en soi)」へと変容を遂げていなければならないのである。「私にとって」から「それ自体で」への自発的な移行、そこにすべての謎がある。この移行と連関して、身体も瞬間的で顕在的なものであることをやめ、「一般性」の様相を身にまとい、「非人称的

²⁰ サルトルの身体論が、対自存在と即自存在という互いに排除しあう存在領域をたてることによって、「デカルト的二元論に閉じこめられ、その成果さえ歪めることになる」点については、末次弘『表現としての身体－メルロ＝ポンティ哲学研究』春秋社、1999年、第二章を参照。

な存在」となっている。顕在的身体をひそかに裏打ちする非人称的な身体、それが「習慣的身体」である(PP, 98)。

「顕在的身体」が、その裏面のようなものとして「習慣的な身体」をはらんでいること、それが手足の切断という出来事のさいに現れ、幻影肢として経験されること、こうしたことはもっと単純に「身体のパテンシャル」として説明してしまえばよいのかもしれない。有機体としての身体は、ふだんはこのパテンシャルを活用してはいないが、有機体が危機に陥ったとき、一種の本能的なメカニズムとして発動し、環境とのあいだに別の回路をうち立てる。顕在的身体が持つ運動性は、習慣的な身体においてパテンシャルなエネルギーに変換され、蓄積されている、というわけである。このパテンシャルエネルギーは、非空間的ないしは超空間的な原理であって、その意味では非物質的なものであろう。

だがこうした解決は、問題をずらしたことにしかならない。このように顕在的身体と習慣的身体を、物質的なものと非物質的なものとして区別してしまうことは、両者の出会いの可能性を閉ざしてしまうことになるからだ。そもそもこのパテンシャルエネルギーが実体として潜在していると考えてしまうならば、なぜ求心性の感覚伝導路の切断が幻影肢を抑止するのがわからなくなってしまう。新たな問題は、なぜこのパテンシャルエネルギーなるものが、「それが実現するために感覚＝運動回路などという非常に特殊な様相を必要とするのか」(PP, 102)ということである。言い換えるならば、非空間的とされるエネルギーがおのれを空間化し、身体の特定の一部分に受肉するのはなぜなのか、ということなのである²¹。

そもそも習慣的身体の持つ超空間性なるものは、身体の諸部分を上からまとめあげているような統合原理ではない。メルロ＝ポンティが強調しているように、「感覚＝運動回路というものは、より統合された実存が問題になればなるほど、より明確に描き出されるものなのである」(PP, 102)。音楽やスポーツのトレーニングの例を考えてみればよい。身体はそれを鍛え上げれば鍛え上げ

²¹ Cf., aussi *Nature*, pp. 299-301. また Gilles Deleuze は *virtuel* と *possible* という両概念を区別し、生物学における *potentiel* という概念が、たんに *possibles* なものの否定的限定による *réalisation* の過程の枠組みで考えられていることを批判している。 *Le bergsonisme*, Paris, PUF, 4^e éd, 1991, p. 100. また Raphaël Gély は最近のメルロ＝ポンティ研究において、おそらく Deleuze のこの区別を意識しながら「幻影肢の誕生は *virtuel* から *effectif* への不可能な移行として理解できる」と説明している。 *La genèse du sentir. Essai sur Merleau-Ponty*, Bruxelles, OUSIA, 2000, p. 180. ただし彼は *potentiel* という言葉を比較的素朴に使用している (*Ibid.*, pp. 146 et suiv.)。

るほどより細分化し、外界からの要求により繊細に応えられるようになる。ある意味では、それは身体を純粋に反射的なものへと練り上げていく過程である。逆説的なことに、ポテンシャルなエネルギーの蓄積は、身体の統合をもたらすばかりではなく、外界との関係において身体をかぎりなく細分化・特殊化していく過程でもあるのだ。

習慣の獲得においては、潜在的な統合と顕在的な分化が同時に生起するのであって、「身体図式」と呼ばれるものは、外部と内部、差異化と統合のパラドキシカルなカップリング (couplage) の場である。だからこそそれは本質的に不安定であり、また「幻影肢」という部分的対象のなかに受肉できるのである。

したがって習慣的身体を「ポテンシャルなエネルギーの蓄積」などといった表現で実体化することは避けなければならない。それがおのれを実現するためには、身体の諸部分に受肉し、そこにおいて差異化し、身体の内部と外部の境界をかぎりなく更新しつづければならない。それはけっして同一化可能な実体としては記述されず、差異としてしか知覚されない。にもかかわらず、その差異の経験が新たな等価体系を呼び起こし、新たな身体図式を成立させてくれるのである。

一般的に言うならば、メルロ＝ポンティが「非人称的なもの」と呼ぶ一種の全体性は、つねに「到来 (avènement)」しつつあるものとしてしか実現されない²²。「非人称的なものの到来」(PP, 99)という経験こそが普遍的なのであって、それは新たな空間を予告する「内的差異」として経験されるのである。

5. 習慣の獲得と意味の創設——身体図式の道具性

しかし「非人称的なものの到来」は、幻影肢といった病理的な出来事、危機的な出来事においてのみ確認されるわけではない。それはひとが新たな習慣を獲得し、身体図式の組み替えや更新が行われるときにつねに到来する。そこでメルロ＝ポンティの習慣論を簡単に検討することにしよう。

習慣の獲得とは、なによりも新たな「道具」の獲得である。たとえば自動車の操縦という習慣の獲得とは身体と車を含んだシステムの獲得である。このシステムが、ある狭い道を車が通れるかどうか、即座に判断させてくれる。また

²² メルロ＝ポンティが *avènement* という用語を使うとき、それはたんなる点的な出来事 (*événement*) ではなく、過去を取り上げなおしながら未来に呼びかけを発し、持続的な次元や構造を制度化するような出来事が想定されている。たとえば *Signes*, Paris, Gallimard, 1960, p. 85 を参照。

目の見えない人の杖の先端はひとつの感覚器官である。杖などの道具を使いこなすこと、それは「そのなかに身を置くこと、そして反対に自己の身体の厚み (voluminosité) にそうした道具を参加させること」である。「習慣が表現しているのは、私たちがおのれの世界内存在を拡張する能力、新たな道具をおのれに併合することによって実存を変化させる能力である」(PP, 168)。

しかしメルロ＝ポンティはこうした実存主義的な習慣解釈で満足しているわけではない。ここまでの分析では、すでに幻影肢の分析において述べたように、習慣が不可能でないことの証明ではあっても、その獲得過程の記述にはなっていないからだ。言い換えるならば、身体がその客観的な境界に閉じこめられておらず、それゆえに道具をも身体図式に組み込むことができる、ということを目指するだけでなく、反対に道具という即自的対象がどのように「身体の厚み」に「参加」しうるかを発生論的に問わなければならないのである。

そのためにまずメルロ＝ポンティは、運動的な習慣の変容の場面に注目し、自然的な身体が、新たな意味という非自然的な要素をおのずからはらむことを指摘することから始め、そこに道具を接ぎ木しようとする。

新たな意味の結び目がかたちづくられるときもある。かつての私たちの運動は新たな運動的な実体へと組み込まれる。私たちの自然的な能力は、突如としてより豊かな意味に結びつくのだ。このより豊かな意味は、いままでは私たちの知覚のないしは実践的領野においてある種の欠如によって指し示されていただけであり、私たちの経験においてある種の欠如によって予告されていただけのものだ。しかしその欠如が到来すること (avènement) によって、突如として私たちの均衡が再組織され、私たちの盲目の期待が満たされるのである (PP, 179)。

身体はたんに生物学的な動作をおこなうばかりではない。それはときに動作に比喩的な意味を与え、「新たな意味の核」をおのれのまわりに顕在化させる。こうしてたとえばダンスといった非自然的な運動習慣が獲得される。ダンスの習得は身体の一部の道具化、非自然化である。この道具化の延長として、身体はおのれの自然的な手段を越えるような意味をめざすときもある。そのとき「身体はおのれのために道具を構築し、おのれのまわりに文化的な世界を投出する」(PP, 171)。

ここで重要なのは、身体の「表出」と意味の超越性という考え方である。私

たちの身体はときとして身体の外に新たな意味の核を顕在化する。そのとき身体は「表出的 (expressif)」であると言われる。表出的身体とは「他のすべてのものの起源であり、表出の運動そのものであり、意味にひとつの場所を与えて外部に投出するものである。身体によって、意味は私たちの手もと、私たちの眼下に、事物として存在しはじめる」(PP, 171)。

たとえばダンスにおいては、まず自然的な身体の統一性が破壊され、しばしば不自然な姿勢が要求される。身体はおのれ自身のまわりで回転し、ねじれ、身体各部分は道具として自立し始めるのだ。そのときダンサーは世界を自然的な身体と同じようには知覚しないだろう。「私たちの知覚的ないしは実践的領野」に「ある種の欠如」がかいま見られる。幻影肢のごときものも現れるかもしれない。ダンサーはさらに訓練をかさね、その「欠如」にいわば身を貫かれるがままにすることによって、それを身体図式のなかに組み込んでいく。そのとき新たな運動習慣が獲得される。同時に、たんに「ある種の欠如」としてしか予告されていなかったものを核として、新たな知覚世界が結晶化し、その意味の核は「事物として存在し始める」。それは見えるようになり、さわれるようになるのだ²³。

したがって、ある運動習慣の獲得は新たな意味の生成と同時である。さらにその対象は、ひとが手や眼で取り扱うことのできる「道具」の生成と直接に関連している。しかし道具が私たちの前で存在し始めるためには、身体そのものがおのれにたいして折れ重なり、「自然」的な身体にたいする微妙なズレを内側から生み出さなければならない。それは自然的世界にたいしては「ある種の欠如」であるが、それは文化的世界が到来するための「意味の核」であり、一種の過剰でもある。

ただし文化的世界は、自然的世界の上のもう一つの世界として到来するわけではない。自然的世界の「ある種の欠如」は、あくまで自然的世界のただ中に出現するのであり、自然的世界のおのれにたいする「内的差異」ないしは「距離」をマークするものだからだ。言い換えるならば、自然的世界における内的

²³ 貫成人氏は、まさにメルローポンティの身体図式論や習慣論を参照しながら、現代舞踊や Judith Butler のジェンダー論などを分析している。たとえば土方巽の暗黒舞踏における身体は「通常の身体図式という類に包摂される新種の身体図式ではなく、身体図式というものが機能するための基本構造を逆転したものである」と述べているが、これは身体図式の本質的な不均衡性と私たちが呼んだ様態をさらに押し詰めたものと考えることができる。貫成人『く不気味なものとしての身体』『思想』(岩波書店)、No. 916, 2000年10月、pp. 244-245。

な差異の現れと文化的な世界の到来は循環的に絡み合っているのであって、重要なのは両者を媒介する第三の場なのである²⁴。

したがって自然と文化の対立は暫定的なものである。習慣の獲得の瞬間そのものは文化的でも自然的でもなく、両者が循環的に基礎付け合う過剰な場を顕在化している。まさにそこにおいて道具が生成する。道具は、身体のおのれにたいするズレを証言する非自然的な記号として到来しながら、身体を補填しておのれを自然化し、身体の延長となるのだ。

だから「杖は身体の延長である」という命題と「手は道具である」という命題は、いずれも正しく、いずれも抽象的なのだと言ってもよい。両者は「非人称性の到来」という出来事を表現するふたつのやり方である。いずれにせよ、習慣や道具の獲得とは、たんに知覚的・運動的な訓練ではなく、客観的世界や文化的世界の到来の根拠であり、私たちが別のところで「身体の根源的な制度化」と呼んだもの²⁵のひとつなのである。

終わりに

オリバー・サックスのある患者は、義足をつける前に毎朝幻影肢を「起こす」という。朝起きるとまず、切断されたあと残っている大腿基部を曲げたり叩いたりする。すると突然幻影肢が「稲妻に打たれたように (fulgurated)」生えてくる (shoot forth)。そのあとにはじめて彼は義足をつけて歩くことができるという²⁶。

この報告は、幻影肢と義足の等根源性をよくあらわしている。幻影肢とは、身体感覚の欠如が身体図式に同化されず、顕在的な身体の外に非人称的なものが「到来」する事態を指し示している。それはたんなる機械的刺激によって現れるのでもなく、またたんに心理的に生み出されるのでもない。患者は、叩いたり曲げたりという機械的刺激と「起こす」という心理的操作を組み合わせ、それらがかたち作る新たなゲシュタルトとして、ようやく幻影肢を到来さ

²⁴ 周知のようにジャック・デリダは同様のパラドックスを「代補 (supplément)」という用語で思考しようとした。「欠損した自然を代補しなければならないのは文化であるのはたしかだが、この欠損は定義上自然の偶有的なもの、自然からの偏差である」Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Paris, Minuit, 1967, p. 209.

²⁵ 拙稿「身体の根源的な制度化——メルロ＝ポンティの存在論的身体論」筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』第53号、2000年、pp. 1-14 を参照。

²⁶ Oliver Sacks, *The Man Who Mistook His Wife for a Hat*, London, Picador, 1985, p. 64.

せるのである。

この到来と直接に連関しながら、道具も自然的な身体における「ある種の欠如」において生成する。ただしそれは新たな意味の獲得を引き起こす欠如である。道具とは、たんに欠如を補填するものではなく、その欠如を軸として、新たなシステムを到来させるものなのだ。

こうした問題はおそらく、身体の部分という下位システムと、全体という上位システムの関係の問題として一般化されうるだろう。たとえば手を振って歩くとき、その運動は歩行のリズム全体のなかに組み込まれている。しかし手の運動という下位システムは相対的に自立したものであり、だからこそ不意の均衡のくずれにも柔軟に対応できる。幻影肢とは、要素的感觉を失った下位システムが完全に自立し、いわば物となる事態をさす。道具の使用とは反対に、新たな下位システムを別の上位システムに組み込むことである。

しかし幻影肢は、あくまで「自己の身体」の周縁で経験されるものであって、その意味ではいまだ上位システムのなかにとどまっている。また道具の使用においても上位システムによる統合はけっして完結せず、つねに新たな使用方法が考えられるし、なによりも道具は代替可能である。

さらに突き詰めて考えるならば、おそらく上位システムと下位システムという階層構造的な発想そのものが不適切なのであって、おそらくメルロ＝ポンティが「世界」と呼ぶものは、複数のシステムが競合しながら分化する、横断的な「移行」の場において到来すると考えるべきであろう。知覚とは、世界のさまざまなレベルの移行の場において生じ、あるときは二つのレベルを結びつけて共振させ、あるときはレベルの上下を逆転させ、あるときはレベルそのものを解体してしまうような、創造的・暴力的な行為なのである。

その意味では『知覚の現象学』の道具の分析は、生きられた身体と客観的対象の階層構造を前提としたうえで、両者のあいだの構成的な「距離」を顕在化したにとどまっているとも言えよう。しかし道具はやがて機械となり、身体から自立していく。道具そのものが所属している「テクノロジー」という複合的なシステムについてはここでは考察の外部におかれている。もしメルロ＝ポンティを乗り越えることが可能であるとするならば、そのひとつの道は、『知覚の現象学』のように心理学的記述からはじめて超越論的領野へと移行するのではなく、テクノロジーから始めて、その内的な時間性、空間性を検討することにあると思われる。テクノロジーは、かならずしも身体と道具の関係を前提せ

ず、それらを巻き込みながら横断的に生成していくものだからである²⁷。

²⁷ この点については拙稿「技術的対象の現象学——ジルバール・シモンドン思想の射程（2）」東京大学教養学部『外国語科紀要』第43巻第2号、1995年、pp. 25-45を参照いただければ幸いである。